

## 第二部会

### 義務教育終了時の学力調査（第四回中間報告）

1. 昭和27年度研究経過の概要	東京大学	海坂宗臣
2. 精密分析調査結果の概要	国立教育研究所	藤井悦雄
3. 優秀学校の要因分析	東京学芸大学	大塚三七雄
4. 不良学校の要因分析	お茶の水女子大学	吉田昇
5. 学力に及ぶ各種の教育要因について	北海道大学	成戸幡太郎

本研究は、昭和25年度より27年度まで、文部省科学試験研究費を受けて、日本教育学会内の学力調査委員会が実施した協同研究であるので、研究概要も一括取りまとめて報告する。

本研究は、義務教育終了時に習得されていなければならないと考えられる学力が、現在の実状に於て、どの程度習得されているかを調査し、その結果に基づき、学力の最低要求を習得するために如何なる制度、方法、内容の下に教育すべきかという実に対する科学的根拠に立つ意見を呈出することにある。

以上の目的を達成するため、研究を三段階に分け、初年度（25年度）及次年度（26年度）は、義務教育終了時に習得されるべき妥当な学力と何か、即ち基準学力の設定と、かゝる立場から設定された学力がどの程度に達成せられているかの測定を行い、終年度（27年度）に於ては、前年度までの結果に基づいて、学力に影響を及ぶ諸因子の究明が行われた。

初年度は、国語科、数学科、社会科、及び社会的態度の各科目につき、次年度は、理科及び知的操作力につき調査を行った。

これらの調査に当つては、全国的傾向の測定と、教育的因子の追究の必要上、標本校選定には層化別次抽出法が用いられたが、教育的因子による全国の層化データがないため、主として27年度行われた「読み書き能力調査」に使用された *Urbanization*（教育化の現度）による層化によつて行った。

以上の調査結果は、既に各回の中間報告に示された通りである。

全般的な傾向としては、都市が高く郡部が低くなつており、大体 *Urbanization* と並行するが、調査結果を分析検討してみると、教育上の問題として次の諸点が指摘される。

1. 若干ではあるが一般的傾向とは逆に、郡部の学校が優れた成績を示す項目がある。

(42)

2. 男女差に於ても、女子は一般的には男子より低い成績を示すが、項目内容により、その差が著しく示されるもの、僅少なもの、或は逆に反るもの、などが生じている。

3. 項目による正誤の動搖が著しい問題あるいは項目の如何によつて、全局的に見ても、平均75%以上の正答率を有するものから、25%以下にしか及らないものまで生じている。

これらの教育的に見て如何なる原因によつて生ずるかを追求するため、本年度は、前年度までの成績に基いて、上位及中位、下位を示した各代表的なノ校につき全テストの再実施、学校及環境調査、知能テスト、学業成績等、各必要と考えられる資料を策収し、教育上の要因を追求した。

本年度実施された以上の調査の結果は、現在でも整理継続中であるが、現在までに分析検討された結果の概要は次の如くである。

1. 全般的な傾向は、前回までの調査の場合と殆んど同様である。著しい成績の昇降を示した学校はない。

現在までの3ヶ年間に教育上に恒常的な状態にある時代ではなく、生徒の教育経過も教育施設も逐次変化しつつあるにかゝらず、教育の結果として表明される学力に於て、著明な影響があらわれていないと考えられるのである。即ち、これらの学力に対して有する「重み」の程度に關して、慎重な考慮を要する点であろう。

2. 解答 分析により、特に誤答の出現傾向に特殊なものがあること。

現在の資料のみから、これの原因を推察するのは危険であるが、主として教育実施上の諸問題を内蔵していると考えられる。

3. 学校調査(研究の現地視察による)の結果であるから、数量化して表現することは出来ないが、学力阻害因子として、次の如き点が考慮し得ること。

A. 学校の規模の小さいこと

学級数が5以下の学校は、郡鄙のいずれに於ても、良好な成績を示すことはない。

B. 教育的場面での力の平衡状態

その学校区域内で特に教育的な要求や、希望條件が欠如していること。附近に優秀な学校があるとかいう外部的な刺激の有無ではなく、その学校の居る狭い社会的環境内での要求である。

C. 言語的な問題、ある地域に於ては、極端な方言の存在することが教育全

段の進歩を阻害しているように見受けられる。

勿論、学力としての読解力の低下も考えられるが、かゝる意味での言語ではなく、地方的な特色である。

以上の事実は、現地視察の結果問題点として浮び上つたものであるが、これらの取扱には慎重な検討を要するであろう。

本研究全般を通じての結果としては、主として教育を阻害する要因が何であるかに向けられ、それらのうち以上の如き諸点が表面に浮んで来たものである。

これらを是正していくことが大切となることであるが、本研究の範囲内では、これらのいずれが最も重大な条件となるか、また、これらの相互の関聯性はどのようなものであるかが十分に検討し盡されているとは申し難い。むしろこれは今後の進歩に待たなければならぬ。

本研究に於ては、むしろ学力を阻害しているであろうと考えられる条件と仮定し得たものとだけ結論すべきであろう。

これらの個々の条件については、今後の検討にまたなければならぬ。